# 杉田勘兵衛刊本の一特色

和田恭幸

## 一

杉田勘兵衛は寛永期に活躍した書肆の一つである。今日、その活動の足跡は、出版の主体が有力寺院・篤志家等々から、営利を目的とした書肆に移行していった時期の諸相を知るための重要な手がかりとなっている(1)。

例えば、既成の版木を買収・襲用することは、その最も顕著な部類に属するであろう。そこには、書物の流布を願う篤志より、むしろ販売して利潤を得ようとする商業的な刊行意図が直截に示されるもののようである。それを証左する如く、出版物の分野は一貫性に乏しく多岐に亘る。ごく少数を列挙するならば、天台宗の仏書『綱目鈔』(「性宗名目私鈔」・寛永七年刊)、浄土宗の仏書『決疑鈔直牒』(寛永九年刊)、儒書『中庸章句抄』(寛永九年刊)、医書『出証配剤』(寛永十年刊)、往来物『庭訓往来』(寛永十一年刊)・『御成敗式目』(同年刊)、仮名草子『聚楽物語』(寛永十七年刊)等々…。売れそうな本ならば、分野の如何を問わずに何でも扱った、誠に商魂の逞しき相貌が浮かび上がるばかりである。

凡そ、近世初期における出版の商業性を研究課題とした場合、麗々しい善本から新しい知見がもたらされることは少ない。これに対して、版面に「見苦しさ」を有する破綻多き版本の数々は、一見にして大量のデータを提供してくれる。実に、杉田勘兵衛刊本こそ、その類の頂点に君臨する存在であった。

かつて旧稿に述べる如く、寛永六年杉田勘兵衛刊本『大原談義聞書抄』の刊年は全くの偽りであり、当該本は、寛

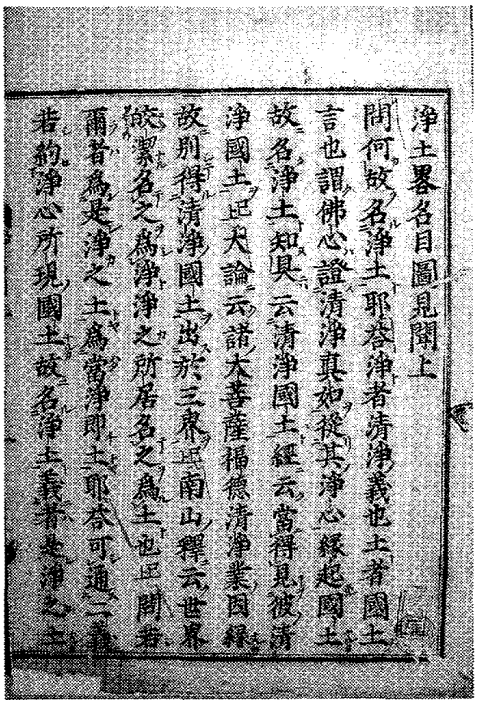
永九年中野道伴刊本の版木を襲用するものであった。[2] そこには、既存の寛永九年刊本と異なる別な一本の如くに見せかけようとした、往事の商業戦術の一つを看取することができよう。

さて、本稿に紹介するものもまたこれと同様、既成の版木を襲用する一例であるが、若干複雑な事例として報告しておきたい。

## 二

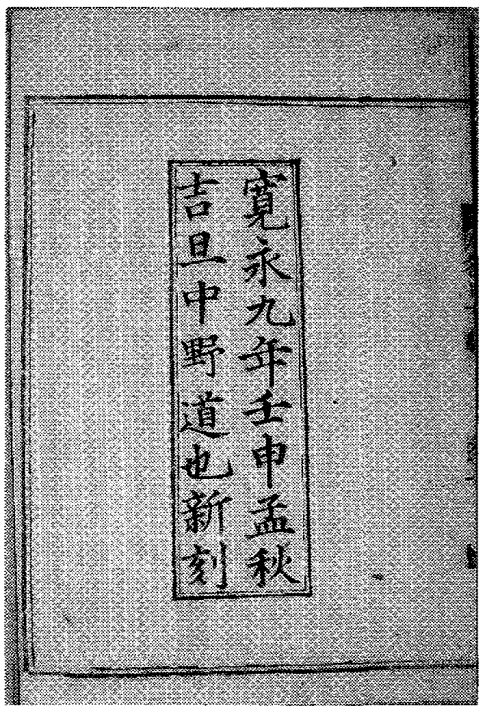
『浄土略名目図見聞』の諸版に、寛永九年中野道也刊本と寛永癸酉（十年）杉田勘兵衛刊本の二本が存在する（以下、「中野版」・「杉田版」と略称）[3]。両者は同一の字配りながら、匡郭と版木全体の摩滅の程度に著しい相異が認められる（図版1・2を参照）。なお、字高には三ミリの差異がある。中野版は二一・二センチ、杉田版は二一・五センチである。凡そ、二～三ミリの差異は、同一版木の早印本と後印本に現れる数値である。覆刻本の場合には、四～五ミリ程度に差異が広がるのであるが、果たして両者は如何なる関係性にあるのだろうか。

ここで、無刊記の寛永中刊本の領域に目を転じたい。もちろん、『浄土略名目図見聞』にも無刊記寛永中刊本が存在する（以下、無刊記本と略称）。本稿では、その内の一本、国文学研究資料館本をとり上げることとしたい。図版3に見る如く、無刊記本の字配りは、杉田版・中野版と同一である。しかも、字体にも類縁性が認められる。その字高は二一・七センチ。字体その他の状況、寸法の差異等々を勘案して、中野版は当該の無刊記本の覆刻本であると考えられる（図版4～6を参照）。

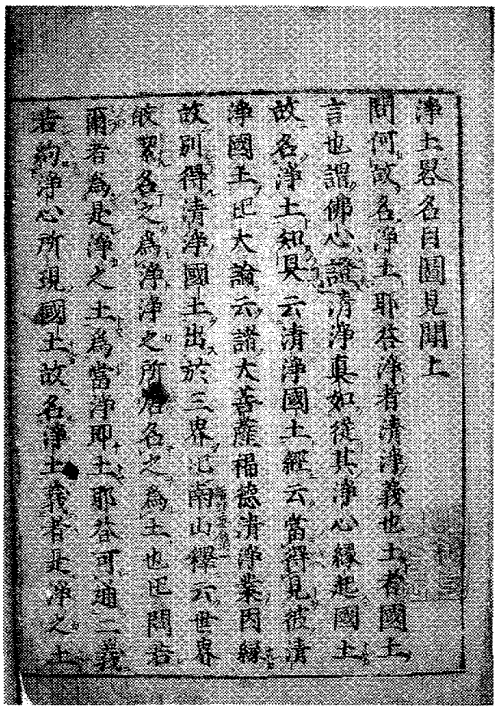

浄土畧名目圖見聞上
問何故名浄土耶答浄者清浄義也土者國土
言也謂佛心證清浄真如從其浄心緣起國土
故名浄土知具云清浄國土經云當得見彼清
浄國土正大論云諸大菩薩福德清浄業因緣
故別得清浄國土出於三界正南山釋云世界
皎潔名之爲浄浄之所居名之爲土也正問若
爾者爲是浄之土爲當浄即土耶答可通二義
若約浄心所現國土故名浄土義者是浄之土

1―①、中野版・巻頭

1—②、同・刊記




2—①、杉田版・巻頭




2—②、杉田版・巻頭



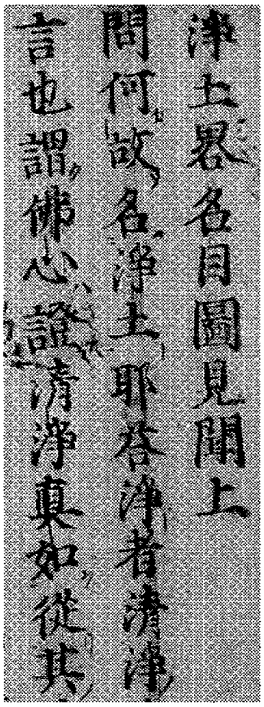

3、無刊記本・巻頭



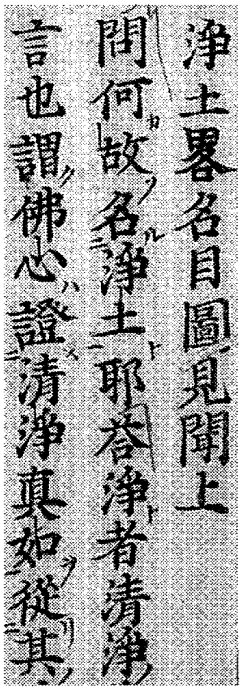
4、無刊記本・部分拡大



5、杉田版・部分拡大



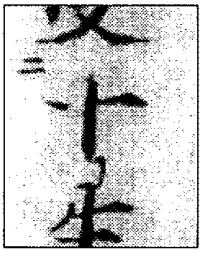
6、中野版・部分拡大



7—①、無刊記本



7—②、杉田版



しかし、杉田版は一体何者であるのか。実をいうと、杉田版の早印本はなかなか見つからないのである。もちろん、中野版の早印本と後印本の存在は容易に確認することができる。もしかすると、杉田版には、もともと早印本など存在しないのでは……。つまり、既成の版木を襲用した可能性が仄ながらも想定されるのであった。

その謎を解くためには、無刊記本と杉田版の版木の欠損箇所の一致を探すことが一番の近道となろう。もしも、両者に同一の欠損箇所が存在した場合、杉田版は無刊記本の版木を襲用した存在であることになる。結論をとり急ぎ述べるならば、両者ともに、上巻の四十二丁オモテの六行めの「十」の文字（行頭から数えて第六字）の横画に版木の欠損が存在しているのであった（図版7を参照）。これによって、杉田版は無刊記本の版木を襲用したものであることが

判明する。なお、三者の関係は以下のようにとり結ばれる。

無刊記寛永中刊本 ―版木を襲用して→ 杉田勘兵衛刊本
無刊記寛永中刊本 ----覆刻して----→ 中野道也刊本

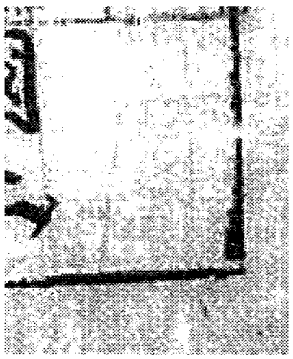
## 三

ここで、謎が一つ残る。図版3に見る如く、無刊記本には匡郭が存在しない。しかし、同一版本を襲用したはずの杉田版には匡郭が存在しているのである。言わずもがな、杉田版の匡郭は後補であることになる。では、なぜ匡郭を後補したのであろうか。

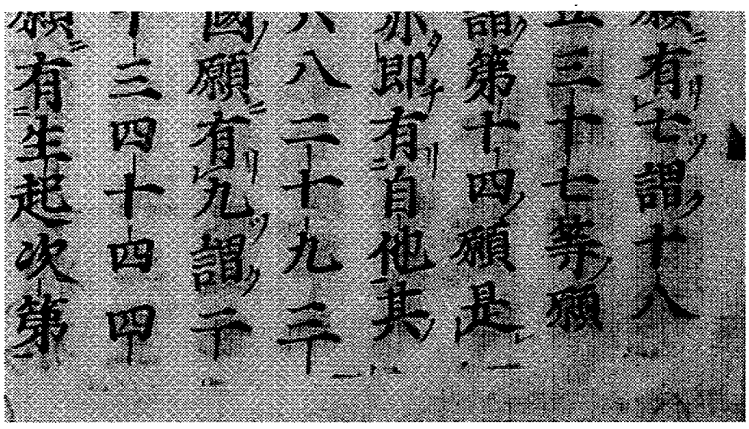
もちろん、覆刻本に匡郭が増補される例は存在する。近世初期に限定していえば、清韓本『古文真宝集』（慶長十九年跋）の跋文が好例となろうか。当該の跋文の丁には、覆刻本にのみ匡郭を存する[4]。しかし、杉田版は覆刻本でなく、単純な版木の襲用である。匡郭の増補にはそれなりの理由が想定されて然るべきであろう。

そこで、もう一度杉田版を眺めることとしたい。図版8は、図版2―①の部分拡大写真である。杉田版の匡郭は、古活字版のように、四方の角に隙間が存在する。その理由を推測するならば、無刊記本の版木の四方を削り落として、匡郭を新彫した新補の木材で四方から締めたと考えられよう。

8、杉田版



9、無刊記本

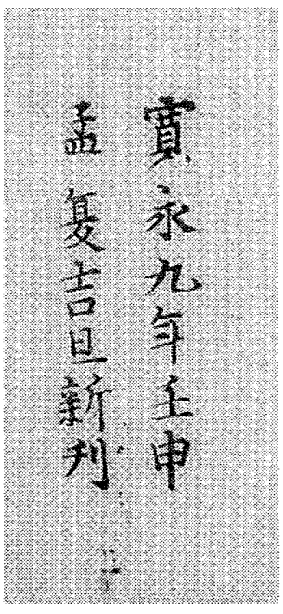


実をいうと、無刊記本の版木には、もともと問題点が存在していたのであった。図版9は、当該原本の五十一丁ウラの部分写真である。各行の下をよく見ると、三行目の末尾、四から五行目にかけての末尾等々に、直線状に墨が付いていることが判る。これと同様の墨付きは、他の丁にも多々存在する。こうした直線状の墨付きが現れるのは、その位置に版木の際（きわ）が存在することに理由が求められるのではあるまいか。つまり、無刊記本の版木はすこぶる余白に乏しい、やや変則的な形のものであったことが推測されるのである。杉田版は、無刊記本の難点を改善するため、もともと乏しかった余白を削ぎ落として、匡郭を付刻した四方を新補したものであると考えられる。

## 四

ところで、図版10は、中野版『浄土略名目図見聞』と一具をなす『浄土略名目図』の刊記である。版木の摩滅・欠損は一目で了解されよう。しかし、それとて薄手の表紙を掛けた、典型的な近世初期刊本なのである。つまり、中野版『浄土略名目図』『浄土略名目図見聞』は、近世初期の段階で版木が欠け落ちる程の、「売れる本」だったことになる。

### 10、中野版『浄土略名目図』の刊記




そもそも『浄土略名目図』『浄土略名目図見聞』は、『釈浄土二蔵義』『釈浄土二蔵義見聞』の諸版には及ばないものの、複数の版を有する書物であった。古活字版には、寛永元年刊本・寛永四年刊本を存し、当該の寛永中無刊記本・寛永九年中野道也刊本・寛永十年杉田勘兵衛刊本、寛永二十年村上平楽寺刊本、そして正保・慶安刊本等々を経過し、延宝三年には法林寺東暉跋の首書本を見るに至る。

如上、杉田勘兵衛の出版活動は、こうした安定した売れ行きの期待できる書物を鋭く見抜き、しかも版木を新彫するコストを抑えた、誠に商業性に満ち満ちたものであった。

時代は、いまだ商業出版の黎明といわれる寛永年間中葉の頃である。

注

（1）杉田勘兵衛の研究に、柳沢昌紀氏著「寛永期の江戸の本屋・杉田勘兵衛尉」（『書籍文化史』3号・二〇〇二年発行）、同氏著「近世前期の書肆・杉田勘兵衛尉をめぐる諸問題」（『中京大学図書館学紀要』24号・二〇〇三年発行）等がある。

（2）拙稿『近世初期刊本小考』（『江戸文学と出版メディア』、二〇〇一年・笠間書院発行）。

（3）本書は、『浄土略名目図』一冊・『浄土略名目見聞』二冊の全三冊で一具となる。寛永九年中野道也刊本の『浄土略名目図』には、「寛永九年壬申／孟夏吉旦新刊」（最終丁ウに双行）の刊記のみを有するものと、これプラスうしろ見返しに「寛永九年壬申十二月／吉日中野氏道也梓」（双郭木記・双行）の刊記を有するものの二種が存在する。なお、後者は国文学研究資料館所蔵（ヤ4／257）。杉田勘兵衛刊本の三冊揃本は伝存未詳。本稿に使用する中野版・杉田版の書誌は以下のとおりである。

中野道也刊本　　二巻二冊　　架蔵本

縹色原表紙（ただし、総裏打ち補修）。寸法、二七・五×一八・九cm。外題「浄土略名目図見聞下」（後補題簽、上巻は外題欠）。内題「浄土略名目図見聞上（下）」。版心「浄名目上（下）　（丁付）」、白口・二黒魚尾。匡郭、四周双辺、二一・九×一六・八cm。本文、毎半葉九行・漢文付訓。刊記「寛永九年壬申孟秋／吉旦中野道也新刻」（双郭木記・双行）。備考、寛永九年中野道也刊本には版木の欠損の著しい後印本が存在する。図版10に掲載する後印本は、当該原本とは別の架蔵本。

杉田勘兵衛刊本　　二巻一冊　　架蔵本

渋引原表紙。寸法、二七・五×十九・二cm。外題「浄土略名目図見聞上」（後補、表紙中央に墨書）。内題「浄土略名目図見聞上（下）」。版心「浄名目上（下）　（丁付）」、白口・二黒魚尾。匡郭、四周単辺、二二・二×一六・六cm。本文、毎半葉九行・漢文付訓。刊記「寛永癸酉初冬吉辰／杉田勘兵衛尉刊行」（蓮牌木記・双行）。印記「明鏡寺／図書記」（単郭長方朱印）。備考、もと二巻二冊（現状は後代の改装）。

（4）図版は「近世初期版本刊記集影」（四）の図版97を参照（国文学研究資料館文献資料部『調査研究報告』第20号）。覆刻本の存在は、同稿補注8に明記。清韓本『古文真宝集』の諸版については、渡辺守邦氏著「表紙裏反古の諸問題・続考」（『實踐國文學』第68号）に詳細に述べられる。

（本学文学部助教授）